

## 「道徳の時間」学習指導案

指導者 中野 詠美子

- 1 日 時 平成20年1月15日(火) 13:30 ~ 14:15  
2 学 級 第6学年5組 34名 (男子17名 女子17名)  
3 場 所 6年5組教室  
4 主 題 「受け継がれる心」 4-(6) 愛校心  
5 ねらい

「新しい小学校なのに、昔の曲は、合わんよね。」という子どもの思いを知らながら、※合奏曲『高美が丘の風』の創作を続けていく灰山先生の気持ちを話し合うことを通して、子どもたちの絆を深めようという灰山先生の気持ちに気付き、伝統を受け継いでいこうとする心情を育てる。

※合奏曲『高美が丘の風』・・・毎年6年生が引き継ぎ、演奏している合奏曲。『現在』『過去』『未来』の三部構成。  
本年度の6年生は、13代目として地域の夏祭りなどで5回の舞台演奏を行った。

- 6 資料名 『風とともに』(自作資料)

### 7 主題設定の理由

#### ○主題観

高学年の内容項目4-(6)は、「先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。」と示されている。

この段階の児童は、最高学年としての自覚をもち、学校を愛する心を具体化することを通して、学校の一員としての自分の役割を自覚し、立派な校風をつくるために積極的に取り組むことが求められる。そのような意識をもつためには、先生や保護者・地域の人々・先輩たちが自分たちや学校のために尽くしていることに気付き、それらの人々への敬愛の念を深め、よりよい伝統を自分たちが引き継いでいるという認識をもつことが大切である。そして、その伝統を積極的に受け継ぎ、学校を発展・向上させようとする心情を育てたいと考え、本主題を設定した。

#### ○児童観

昨年12月に行った児童アンケートによると、本学級の児童は、「高美が丘小学校を誇りに思いますか。」という質問に対して、肯定的な回答が多かった。その理由として最も多かったのは、『伝統があるから。』(18名)であった。また、「高美が丘小学校でこれからも続いてほしいものは、何ですか。」という質問に対して、『高美が丘の風』(28名)という回答が一番多かった。また、『高美が丘の風』は、好きですか。」という質問に対して、全員が肯定的な回答をした。その理由としては、「伝統になっているから。」(15名)「みんなが一つになれるから。」(3名)「元気が出るから。」(3名)と挙げていた。これらの結果から、『高美が丘の風』が、児童にとって友だちや先生との絆を深め、学校の伝統として誇れるものであり、これからもずっと続いてほしいと願っていることがわかった。しかし、創作された背景や創作者の願いを知る児童はいない。

#### ○資料観

本資料は、「高美が丘小学校開校時に赴任された音楽の担当、灰山久美子先生は、通い慣れた小学校を後にし、高美が丘小学校に来たことを寂しく感じていた児童の心に動かされ、合奏曲『高美が丘の風』を創作した。灰山先生の願いが込められた『高美が丘の風』は、本年度の13代目まで受け継がれ、これからも受け継がれるであろう。」という内容である。児童の絆を深めようという願いで、合奏曲『高美が丘の風』を創作した灰山先生の心に触れることで、学校の伝統を受け継いでいこうとする心情を育てることができる資料であると考えられる。

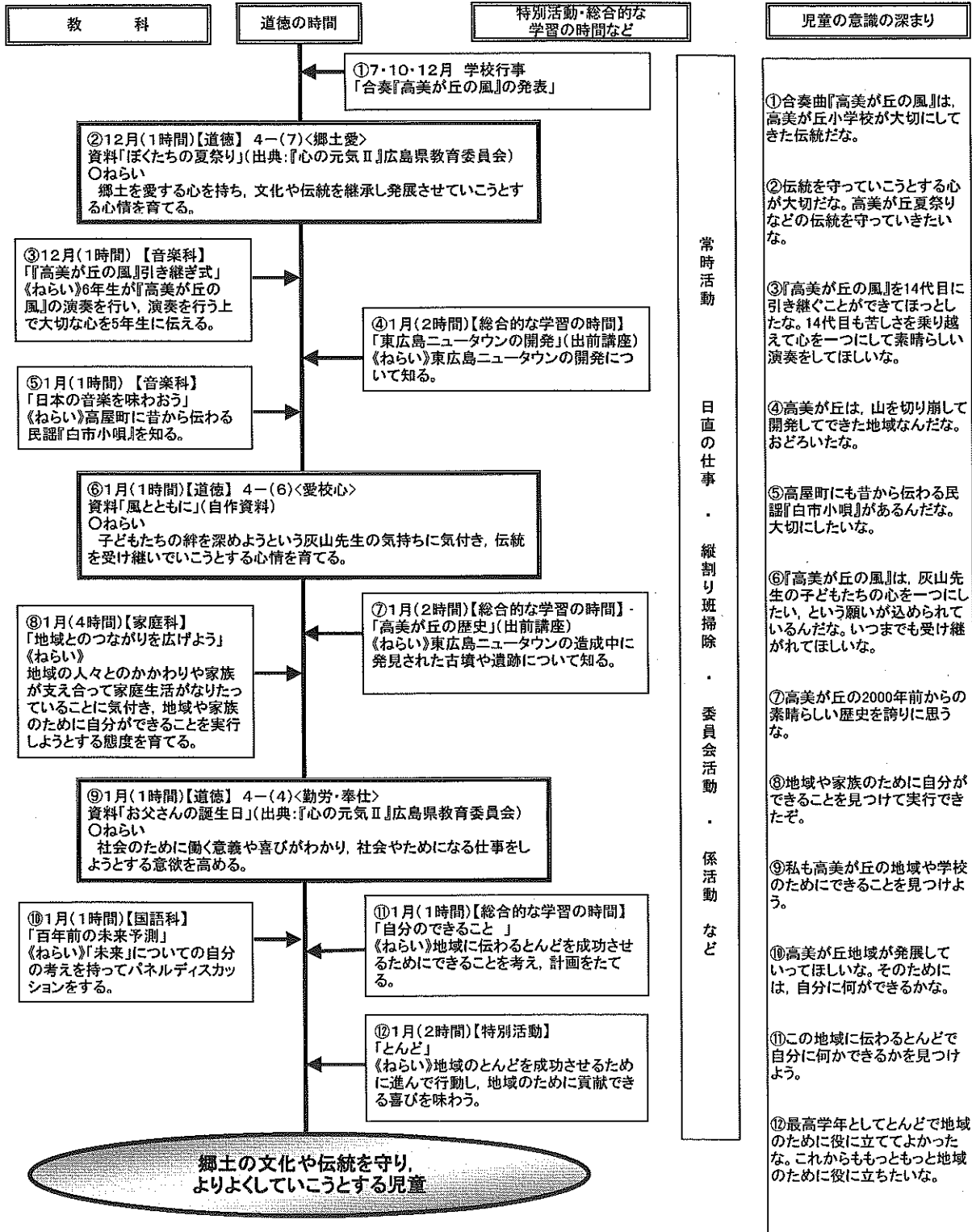
#### ○指導観

指導に当たっては、展開前段では、灰山先生が、新しい高美が丘小学校に来たことで寂しい思いをしている児童の気持ちを感じ取り、児童の絆を深めさせるために何かをしようと思う心の動きに気付かせたい。

また、展開後段において、子どもたちの絆を深めさせようとして『高美が丘の風』を創作した灰山先生の気持ちに気付かせ、これからも『高美が丘の風』が受け継がれていってほしいという心情を高めたい。

## 8 総合単元的な道徳学習の構想図

総合単元名	ぼくたちのふるさと 高美が丘 【12月～1月】	
めざす児童像	郷土の文化や伝統を守り、よりよくしていこうとする児童	中心項目：4-(7)郷土愛 関連項目：4-(4)勤労・社会への奉仕、4-(6)愛校心
ねらい	郷土の歴史や人々の努力を知ることを通して、郷土の文化や伝統を守り、地域をよりよくしていこうとする態度を育てる。	
単元設定の理由	本校児童の約9割が新興住宅地に住んでいるという実態の中で、6年生の児童は、高美が丘の地域についての関心や愛着心がやや薄いということがわかった。(全国学力状況調査の児童質問紙アンケートより) そこで、この地域の歴史や地域が出来るまでの人々の努力を知ること、文化や伝統を大切に、進んで地域をよりよくしようとする態度を育てたいと考え、この単元を設定した。	



## 9 学習指導過程

階	学習活動	主な発問と児童の意識の流れ	指導上の留意点☆言語技術	評価の観点と方法
導入	1 『高美が丘の風』について話し合う。	○何が『高美が丘の風』を今日まで受け継がせてきたのだと思いますか。 ・聞く人を感動させるところ ・伝統を大切にしてきた6年生の姿 ・受け継いでいこうという先生たちの思い	○合奏した時の感動を想起させるために、授業前に『高美が丘の風』を演奏する。 ○自分の体験から考えさせるために、5回の舞台発表を想起させる。	
展開前段	2 資料「風とともに」の前半Aの内容について話し合う。	○始業準備をしている灰山先生は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・子どもたちのために準備をちゃんとしよう。 ・子どもたちの笑顔が見たい。 ・何が何でも間に合わせなければ。  ○「新しくきれいな学校なんだけど、自分の学校っていう気がせんのおよね・・・。」という子どもたちの言葉から、灰山先生はどんな気持ちになったのでしょうか。 ・子どもたちがかわいそうだな。 ・この学校に来てよかったと思えるものがあるのではないだろうか。 ・子どもたちが一つになれるものが必要だな。	○資料の内容を正しく把握させるために、教師の語りと補助教具による再現構成法的な資料提示を行う。 ○高美が丘小学校の開校当時の様子を把握させるために、当時の様子を語って聞かせる。 ○子どもたちの言葉を聞いて灰山先生が思ったことを考えさせることで、先生の子どもたちに対する思いの深さに気付かせる。	
展開後段	3 資料「風とともに」の後半Bの内容について話し合う。	○灰山先生は、どんな願いをもって曲を作ったのでしょうか。 ・子どもたちが心を一つにしてほしい。 ・高美が丘小学校の独自のものと誇れるものが作りたい。 ・いろんな学校から集まってきたことを曲に表現したい。  ◎「新しい小学校なのに、昔の曲は、合わんよね。」という子どものつぶやきを聞いた時、灰山先生は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・新しい学校だからこそ、昔から伝わっているものを大切にしなければいけない。 ・何が何でもいいものを作るぞ。 ・子どもたちが満足する曲になるのだろうか。 ・子どもたちが誇れるものを作りたい。 ・子どもたちが絆を深められるものが必要だ。  ○灰山先生は、なぜ『中国子ども音楽会』で最優秀賞をとれたと思っているのでしょうか。 ・みんなで頑張って練習したから。 ・子どもたちの心が一つになったから。 ・苦しい練習を乗り越えたから。	○灰山先生は、子どもたちの心を一つにしたいという願いをもって、曲作りを行ったことに気付かせる。  ○創作中の先生の気持ちを考えさせることで、心には様々な葛藤があったことに気付かせる。  ○『高美が丘の風』の演奏で最優秀賞を獲得できたのは、子どもたちの絆が深まったからだに気付かせる。	☆灰山先生の子どもたちの絆を深めようとする気持ちに気付くことができたか。 【ワークシート・発言】
終末	4 『高美が丘の風』について話し合う。  5 灰山先生の話聞く。	○何が『高美が丘の風』を今日まで受け継がせてきたのだと思いますか。 ・よりよいものを創りたいと思う灰山先生の思い ・受け継いでいこうという6年生や先生たちの思い ・感動を与える演奏 ・6年生と先生の心のつながり ・地域の人の応援  ○当時、どのような願いで『高美が丘の風』を作ったのかについて話します。	○価値の高まりを確認するために、導入と同じ発問をする。 ☆学校の伝統を創り上げていくためには、子どもたち・先生たち・保護者・地域の方の絆が必要であることをクラストークで話し合わせ、 <b>一般化</b> を図り、学校の伝統を受け継いでいこうとする心情を育てる。 ○曲作りを行った時の灰山先生の気持ちを直接聞き、子どもたちの絆を深めようという気持ちが『高美が丘の風』を創作させたことを改めて感じさせる。	

## 『風とともに』

広島県のほぼ中央に位置する東広島市。そこには、わたしたちの町、高屋高美が丘があります。米作りの技術が伝わった弥生時代には、この地域に、『むら』が増え、人口が爆発的に増加しました。その時代の遺跡が地中から目覚めたのは、東広島ニュータウンの造成工事中でした。近隣公園の遺跡から発見された土器や墓は、多くの人が集い、文化を創り上げたことを物語っています。二千年の時を超え、再びこの地に様々な地から人々が集い、新しい風が吹き始めようとしていたのです。

### A

灰山先生が、誕生したばかりの高美が丘小学校の門をくぐったのは、平成4年4月1日。1・2・3・4丁目の団地には人々の笑顔が満ちあふれていましたが、9丁目は、まだ山の中に眠っていました。運動場では、ブルドーザーが忙しそうに動き回り、校庭には『けやき』の木が1本たたずんでいるだけ。広い敷地内にどっしり建っている校舎や体育館が、なぜか寂しそうでした。

（あと数日後に新学期が迎えられるのだろうか。）

灰山先生はそう思いながら、一緒に赴任した25人の先生たちと玄関に向かいました。

玄関の前には、驚いたことにPTA会長の寺尾さんやPTA副会長の甲斐さんたちの笑顔が待っていました。

「先生方、今日からどうぞよろしくお願いします。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

灰山先生たちは、心の底から力が湧いてくるのを感じました。

その日から先生たちの学校づくりが始まったのです。まずは、新学期の準備です。ビニールで覆われた新しい児童机約500台のビニールをはがしたり、その机を新しい香りのする教室へ運び入れたり、入学式の看板を作ったり、息をつく間はありませんでした。全児童474人があと数日で新校舎にやってくるのです。高屋掘地域の子どもたちは高屋東小学校から、杵原地域の子どもたちは高屋西小学校から、東広島ニュータウンに引っ越して来た子どもたちはそれぞれ別々の小学校から。通い慣れた学校を後にし、複雑な思いをもって来るにちががありません。まだ見ぬ子どもたちの顔を想像しながら、毎日夜遅くまでの準備が続きました。

新学期、子どもたちは緊張した様子で登校してきました。

「おはよう。よう来たね。」

灰山先生たちは、精一杯の笑顔で迎えました。先生と子どもたちが体育館に勢ぞろいです。校歌のない始業式を終え、いよいよ高美が丘小学校の歴史が幕を開けたのです。

開校してしばらくたっても、子どもたちは、以前通っていた学校のことが忘れられないようでした。

「新しくてきれいな学校なんだけど、自分の学校っていう気がせんのよね・・・。」

灰山先生は、子どもたちの話をよく耳にしました。子どもたちの心は、いろいろな方向を向いていました。灰山先生は、そんな子どもたちが気がかりでした。この子たちに必要なものは何だろう、先生は、真剣に考えました。

### B

開校4年目の平成7年。この年の6年生は、卒業生が2年連続出場した『中国子ども音楽会』に出ることに意欲満々でした。『中国子ども音楽会』とは、毎年12月に広島市で行われる音楽のコンクールのことです。音楽が大好きな女の子たちが、

「先生、今年は何の曲をやるんですか？」

と灰山先生に尋ねました。

「そうねえ、何にしようかな。」

「高美が丘小学校の私らにしかできないものがないな・・・。」

灰山先生は、ぱっとひらめきました。すぐに、6年生の先生たちと作戦会議です。

「この地域の民謡を取り入れた合奏曲を作ろうと思うんだけど、どうかな。」

灰山先生と6年生の先生たちは、すぐに心が一つになりました。

灰山先生が以前勤めた学校では、毎年6年生が酒まつりでオペラを上演していました。その地に昔から伝わる酒造りや盆踊り歌を取り入れ、新しい曲に作り直したオペラです。厳しい練習を乗り越え、舞台上で演奏した後の子ども

もたちの輝く笑顔。この高美が丘小学校も、この地域の民謡を取り入れて新しい曲に創り直すことができないだろうか。高屋町にも、昔から伝わっている民謡『白市小唄』『白鳥音頭』があります。この学校に様々な地域から子どもたちが集まったことを曲の中に表現できたらどんなに素敵だろう！先生の思いは、どんどんふくらみました。灰山先生が、まず取りかかったのは、民謡を録音したテープを聞き取り、楽譜におこすことでした。これが『過去』になる部分でした。出来たところまでを6年生に聞かせました。

「えー！」「ゆっくり・・・。」「うーん。」という反応。「新しい小学校なのに、昔の曲は、合わんよね。」というつぶやきも聞こえます。それでも灰山先生の創作にかける情熱や願いが変わることはありませんでした。次に、民謡を現代風にアレンジしました。これが、後に『未来』になる部分です。やっと完成したのは、9月の終わりでした。作り始めて6ヶ月。完成した曲を子どもたちに聞かせる前、この曲をどんな願いをもって作ったのか、6年生の子どもたちがどうなってほしいのか、灰山先生と6年生の先生たちは熱く語りました。6年生は、物音一つ立てず真剣に聞いていました。灰山先生たちは、3つの曲で構成されたこの曲を『高美が丘の風』と名付けました。

いよいよ『高美が丘の風』の本格的な練習が始まりました。目標は、『中国子ども音楽会』で最優秀賞をとること。6年生101人は、同じ方向に向かって歩み出しました。

「一人でも力を抜いたらみんなの演奏にはなりませんよ！」

来る日も来る日も厳しい練習が続きました。和太鼓グループには、放課後の特訓も待っていました。

「やる気が感じられん！もういい！教室に戻りんさい！」

心を鬼にして、ぼう然とする子どもたちを教室に追い返したこともありました。でも、あきらめたり、投げ出したりする6年生は、一人もいませんでした。

「先生、もう一度やらせてください。」

子どもたちは、どこまでも灰山先生についていきました。

その年の『中国子ども音楽会』の会場。『高美が丘の風』の演奏が終わり、割れんばかりの拍手喝采が響き渡っていました。結果は、『最優秀賞』。子どもたちの顔には、輝く笑顔が咲いていました。灰山先生は、子どもたち101人が共に何かをつかんだことを感じていました。

## C

1代目の女の子が『高美が丘の風』に寄せる思いを、卒業文集に残しています。

「終わった時は、これでなにもかもやりとげられたという気持ちでした。思えば、演奏会に出られて本当の緊張と、本当の音楽について学べたと思います。・・・。「私たち『高美が丘小』の『高美が丘の風』。私は、高美が丘があるかぎりいつまでも受け継がれたらいいな、と思います。」

その13年後。平成19年12月。校庭のけやきの木は、見上げるほどになっていました。学芸発表会では、第13代目の『高美が丘の風』が高らかに体育館に響き渡っていました。1代目と変わらない迫力ある音色。合唱曲『風になる』『夢の向こうに』も加わり、見事な進化を遂げていました。最後の舞台を惜しみながらも、やり遂げた喜びでいっぱいの子の笑顔は、まぶしいばかりでした。

『高美が丘の風』は灰山先生の思いや歴代の卒業生や地域の人たちの思いをのせて、これからも力強くこの丘の上を吹き続けるに違いありません。